

グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家 日本における翻訳と絵の変遷

部 矢 祥 子

はじめに

「ヘンゼルとグレーテル」と「お菓子の家」は広く知られている。

その証拠に、一五代ヘンゼル役に扮した俳優が菓子を作り菓子のエピソードを紹介する「グレーテルのかまど」は、二〇一一年から続く人気テレビ番組である。また、二〇〇〇年からの二〇年間に、「ヘンゼルとグレーテル」名を冠したアメリカ映画が複数製作され、このうち六作品は、日本で劇場公開またはDVDスルールの形で販売・レンタルされている。⁽¹⁾

絵本『ヘンゼルとグレーテル』が何種類も出版されてお

り、そこには各種の菓子で作られた色彩豊かな家が描かれている。桐生操の『本当は恐ろしいグリム童話』(KKベストセラーズ、一九九八年)や、ハンス・トラクスラーの『本当にあった?グリム童話「お菓子の家」発掘』(現代書館、二〇一二年)も話題を呼んだ。

クリスマスが近づく頃、洋菓子職人だけでなく芸能人や学生たちが、菓子を手作りし、または市販の菓子を使って、食べることで人が出入りできる大きさの家を作り、その様子がテレビや新聞などで紹介される。⁽²⁾ スーパーマーケットや輸入食品取扱い店では、国内外製のお菓子の家手作りキットを多種販売し、⁽³⁾ デパートでは、お菓子の家形のクリスマスケーキや、⁽⁴⁾ ケーキの上にウエハースやチョコレートで作った家に乗せているものを見かける。⁽⁵⁾

このように、「ヘンゼルとグレーテル」と「お菓子の家」は、身近なものになっている。しかし、これがどこの国の話なのか、この話が日本に伝わったのはいつなのかを正しく理解している人は少ない。

グリム童話の研究は、一九八六年のグリム兄弟生誕二〇〇年記念時と、二〇一二年のグリム童話誕生二〇〇周年時に進展した。大学や図書館でシンポジウムや展覧会が開かれ、著書や論文が発表された。「ヘンゼルとグレーテル」の研究においても、精神分析的解釈がなされ、物語の構造や道德観が明らかにされ、日本の昔話との比較なども行なわれてきた。

しかし、お菓子の家の場面に着目して、この話が初めて翻訳されて以降、現在までの本文と絵の変遷を追った研究はない。例えば、二〇〇七年発行の絵本を開くと、お菓子の家の屋根はランゲドシヤで、入り口はねじり棒キャンディ、扉は型抜きクッキーと京飴、窓はチョコレートソーラスや輪切りレモンなどで装飾されている。二〇一三年の絵本では、家は色とりどりのゼリービーンズやマカロン、各種（アイスボックス・型抜き・ジンジャー・ドレンチェリー）のクッキーでできている。けれども、当初からこのような

家であつたはずがない。⁽¹⁾

では、これまでお菓子の家の場面がどう翻訳・表現され、どのような家として描かれてきたのだろうか。本稿は、明治時代から現在までに日本で出版された「ヘンゼルとグレーテル」の翻訳本と絵本を広く通覧し、お菓子の家の表現と変遷を明らかにするものである。「ヘンゼルとグレーテル」から誕生したお菓子の家が、明治以降の日本において、菓子的发展に伴つて変化して行く様子が窺えるのである。

なお本稿は、邦訳の変遷に主眼を置いているため、原文（ドイツ語）は示さない。

一、グリム童話と挿絵

グリム童話とは

グリム童話は、ドイツのグリム兄弟、兄のヤーコプ（一七八五―一八六三）と弟のヴィルヘルム（一七八六―一八五九）が、ドイツや周辺諸国で語り継がれていた昔話や民話を収集したものである。

兄弟は、一八〇六年頃から話の収集を始めた。彼らが話を聞き取り、その出版を行なったのは、ナポレオン戦争で

悲境にあえいでいたドイツ国民に、民族としての自覚と誇りを取り戻させたい思いがあったからである。

一八一二年に「子どもと家庭の童話」と題して第一巻を出版し、一八一五年に第二巻を出版した。話の数は、第一・二巻の初版時に一五六話。一八五七年の第七版（最終版）では二一〇話に増えた。兄弟は約半世紀にわたって版を改め、加筆した。

兄弟に話を語ったのは、大部分が女性だった。中でも、カッセルのヴィルトという薬屋の娘たち（姉のグレーチヒエン、妹のドルトヒエン⁽¹²⁾）が多くを語った。一八一三年からは、ドロテー・フィーマン（一七五五—一八一五）の協力を得、彼女が語った話は第二巻に収められた。

グリム童話は、ドイツ語で書かれた本の中で最も多くの言語（一七〇以上）に翻訳され、聖書に次いで広く世界中で読み継がれている。一般的に読まれているのは、第七版を翻訳したものである。

「ヘンゼルとグレーテル」は、このグリム童話の一五番目の話である。

グリム童話の挿絵

グリム童話には当初、挿絵はなかった。初版本（一八一二年の第一巻と、一五年の第二巻）に挿絵はなかったのである。

一八一九年の第二版の一卷と二巻の巻頭に、グリム兄弟の末弟で画家のルートヴィヒ（一七九〇—一八六三）による銅版画が一枚ずつ入った。一卷は「兄と妹」（二一番目の話）の絵、二巻はフィーマン（話の語り手）の肖像画である。

一八二三年、イギリスでクルクシャンク（一七九二—一八七八）の銅版画一二枚を入れた『ドイツ民衆メルヘン』（グリム童話の選集）が翻訳出版され、反響を呼んだ。この本に刺激されたグリム兄弟は、一八二五年に五〇話を選び、ルートヴィヒの銅版画七枚を入れた『グリム童話名作選集』を出版した。クリスマスに出版されたこの本は好評を博し、グリム兄弟の著書のうち最も広く読まれた本である。

一八九三年、グリム童話の全話に挿絵が入った。絵はグロート・ヨハン（一八四一—一九二二）の。この後、オットー・ウベローデ（一八六七—一九二二）も、各話にもれなく挿絵を描いた⁽¹³⁾。以来、グリム童話の挿絵は各国で描かれている。

お菓子の家を描いたドイツの画家たち

先述の通り、グリム兄弟は、一八二五年に弟・ルートヴィヒの銅版画七枚を入れた『グリム童話名作選集』（五〇話の選集）を出版した。この五〇話に「ヘンゼルとグレーテル」が選ばれ、銅版画七枚のうちの一枚は「ヘンゼルとグレーテル」の絵である。これが「ヘンゼルとグレーテル」の最初の挿絵であるが、描かれたのはお菓子の家ではなく、ヘンゼルが家畜小屋に閉じ込められた場面である。⁽¹⁴⁾

では、お菓子の家はいつ頃から描かれ始めたのだろうか。以下に、お菓子の家を描いたドイツの画家たち（一九世紀生まれに限定して）の名前を挙げ、この絵を掲載した、比較的容易に見ることができる日本の本を記しておく。

1、ルートヴィヒ・リヒター（一八〇三—一八四）

高橋健二『完訳グリム童話全集1』

小学館、一九七五年

2、テオドル・ホーゼマン（一八〇七—七五）

〈一八六八年のドイツ一枚絵五三号〉

野村滋『目で見えるグリム童話集』

ちくま文庫、一九九六年

3、ルートヴィヒ・ピーチュ（一八二四—一九一）

虎頭恵美子『図説グリム童話』

河出書房新社、二〇〇五年

4、ヘルマン・フォーゲル（一八五四—一九二一）

〈一八九四年の絵〉

鈴木晶『グリム童話—メルヘンの深層』

講談社現代新書、一九九一年

5、エルンスト・クライドルフ⁽¹⁵⁾（一八六三—一九五六）

〈一九〇三年の絵〉

吉原高志・吉原素子『初版グリム童話集』

白水社、一九九八年

6、オットー・ウペローデ（一八六七—一九二二）

小沢俊夫『オットー・ウペローデ グリム童話全挿絵集』古今社、二〇〇二年

ドイツでは、一九世紀後半にはお菓子の家を描いている。ドイツの画家たちの絵は、日本人が描いた絵との違いを知る上で重要な資料となる。後述するが、日本で初めてお菓子でできた家を描いたのは、管見では岡本帰一で、大正五（一九一六）年のことである。

二、翻訳されたグリム童話と

「ヘンゼルとグレーテル」の

お菓子の家

翻訳されたグリム童話

グリム童話が日本で翻訳され始めたのは明治時代である。明治六（一八七三）年に松山棟庵が「くぎ」（K H M 一八四）、一九年にタカヤマキンイチロウが「牧童」（K H M 一五二）を翻訳し、二〇年に桐南居士（蒼了法）が「灰かぶり」（シンデレラ）など一話を、呉文聡が「狼と七匹の小山羊」を翻訳した。この後、次々に翻訳されてゆく。⁽¹⁶⁾

大正時代に入り、中島孤島の『グリムお伽話』と『続グリムお伽話』（ともに大正一三年）が出版されたが、抄出本である。初めて全訳を行なったのは金田鬼一である。大正一三年から昭和二年に『世界童話大系』（第二・三巻、独逸編、グリム童話集）に収められ出版された。

後述するが、「ヘンゼルとグレーテル」が初めて翻訳されたのは、明治三五年である。

「ヘンゼルとグレーテル」のストーリー

ストーリーの概略を、グリム童話の第七版に拠って記しておこう。

飢饉で食べ物がなくなった木こり夫婦は、子ども（兄のヘンゼルと、妹のグレーテル）を捨てようと森に置き去りにした。兄妹は、一度はヘンゼルの機転（小石をポケットに忍ばせておき、来た道に落として置く）で家に帰りつくが、二度目（パンをポケットの中で碎き、ひとかけらずつ来た道に落として置いたが、それは小鳥に啄まれてしまった）は失敗した。

兄妹は空腹のまま森の中をさまよい歩き、パンでできた家を見つける。しかしその家は、子どもを殺して煮て食べる魔女の家だった。

ヘンゼルは家畜小屋に閉じ込められ、グレーテルは魔女に従い働かねばならなかった。しかし、グレーテルの機転（魔女をパン焼き窯に押し入れ、焼き殺してしまう）で、兄妹は家に帰ることができた。

兄妹が森の中で見つけた家は何と表現されているか

兄妹が森の中で見つけた家は、グリム童話の初版以前、初版、第二版、第七版で何と表現されているだろうか。まずこれを、日本の翻訳本（以下では、グリム本と略称する）に拠って確認しておこう。表現の違いが分かりやすいように表で示そう。

表 1

版	家	家の様子	屋根	窓
初版以前	小さな家	パンで作られている	ケーキで葺かれている	砂糖でできていた
初版	小さな家	まるごとパンでできている	ケーキで葺かれていた	白い砂糖で作られていた
第二版	小さな小屋	家ごとパンでできている	ケーキでふかれていた	白いさとうでできていた
第七版	小さな家	パンで作られている	ビスケットでふいてある	砂糖でできていた

グリム本では、家の大きさと、家が何で作られているのかを語っている。家は小さく、パンで作られていて、屋根はケーキ（第七版はビスケット）で葺かれ、窓は砂糖（白い）でできていた、とある。屋根の材が、第七版の翻訳で異なっている点に注意しておきたい。⁽¹⁸⁾ なお、グリム本では「お菓子の家」という表現は見られない。

三、明治時代の「ヘンゼルとグレーテル」 お菓子の家の翻訳・表現、挿絵

初めての翻訳本と、明治時代の翻訳本

「ヘンゼルとグレーテル」が日本で初めて翻訳されたのは、明治時代である。明治時代の翻訳、その年・月、題名、訳者名、掲載誌名・書名または出版社名を記す。⁽¹⁹⁾

- ①明治三五年一〇月 ヘンゼルとグレーテルと
山君 万年艸
- ②明治三五年一二月 深い深い森の中
佐藤天風 女鑑
- ③明治四一年八月 鬼婆退治
暁影生 家庭雑誌
- ④明治四二年三月 兄と妹
水野繁太郎・権田保之助
『独逸文学叢書』第二編、有朋堂書店
- ⑤明治四三年一二月 兄と妹
柴田流星『お伽草紙日曜学校話材』

第四編、教文館

⑥明治四四年二月

ヘンゼルとグレーテル 日野 蕨村

『家庭講話ドイツお伽噺』岡村書店

初めての翻訳者は山君で、明治三五年に文芸誌『万年艸』一号に掲載された。山君は森鴎外の長男・森於菟（一八九〇―一九六七）である。この時、於菟は一二歳。父からドイツ語を教わっており、グリム童話を訳すことを薦められていた。『万年艸』は、鴎外が中心になってこの年創刊したが、鴎外の日露戦争従軍によって二年後に終刊となった。

明治四一年からは毎年一種の翻訳が確認でき、この話が日本で知られるようになったのは、明治後期からであったと言える。ただし題名は、「深い深い森の中」②、「鬼婆退治」③、「兄と妹」④⑤とあり、定まっていなかった。題名には、翻訳者が話の主題をどこに置いていたかが表われている。②は二人が置き去りにされる森、③は子どもを食い殺す鬼婆、④⑤は兄妹の行動に主眼を置いていたことが知られる。

兄妹の名前も定まっておらず、①はグレエテル、④⑤は兄と妹とあり、②の文中ではグレッテル、③の文中ではハンゼル、グリテル・グリデル・グレデル・クリデルとある。

大正時代に入っても同様で、ヘンゼルとグレーテルの名で定着するのは昭和の中頃である。^{②)}

明治時代のお菓子の家、翻訳・表現

明治時代の翻訳者たちは、兄妹が森の中で見つけた家を、何と翻訳しただろうか。先に挙げた、グリム兄弟の初版以前から第七版の翻訳（以下では、グリム本と略称する）との違いを念頭に置いて、明治時代の①②③④⑤⑥の本文を見てみよう。表現の違いが分かりやすいよう表で示そう。

表2

番号 年	家	家の様子	屋根	窓	挿絵番号
① M35	小さい美しい家	麴包で築き上げてある	菓子で葺いてある	硝子窓には氷砂糖が嵌められていた	
② M35	一軒の見慣れない家	すっかりパンで建てられている	乾酪	綺麗な砂糖から出来ている	
③ M41	小さい家	おいしいパンや菓子でこしらえている		氷砂糖	
④ M42	一軒の小家	麵麴で出来ていて菓子で蔽われている		輝ける砂糖からできている	
⑤ M43	一軒の美しい家	パンと有平糖と氷砂糖とでつくられている			
⑥ M44	一軒の家	パンで建ててある	パン屑で葺いてある	三本白でこしらえてある	1

グリム本では、家はパンで作られた小さな家で、屋根はケーキ葺き、窓は砂糖でできている、とあつた。

明治時代には、パンで作られた家を、美しい家、見慣れない家、とするものがある①②⑤。屋根は菓子、乾酪、パン屑。窓は奇麗な・輝ける砂糖、氷砂糖、三本白でできているとする。①の「硝子窓には氷砂糖が嵌めてあつた」という表現に注意しておきたい。

グリム本では、家の材に、パン、ケーキ、ビスケット、砂糖を用いていた。これに対して明治時代の翻訳では、パン、パン屑、菓子、乾酪、有平糖、氷砂糖、砂糖、三本白が登場する。このうちパン屑、菓子、乾酪、有平糖、氷砂糖、三本白は、グリム本にはない明治時代特有の翻訳である。特に、「菓子」と「氷砂糖」に注意しておきたい。

②の乾酪^{かんく}とは、チーズのこと。明治四（一八七二）年、仮名垣魯文『安愚楽鍋』の挿絵に、乳製品を販売する店・日の出が描かれ、その暖簾に「乾酪チーズ」とある。日本では明治八年に、初めて北海道の開拓庁勸業試験場で近代ヨーロッパ型チーズが作られ、三三年から函館のトラピスト修道院でも作られた。しかし、本格的に作られるのは昭和八年以降で、昭和初期まではほとんどが輸入品であつた。

②の翻訳は明治三五年。明治の人々は乾酪を、異国の食べ物とイメージしただろう。乾酪で「見慣れない家」を表現したと考えられる。

⑤の^{ありへいとう}有平糖は、砂糖に水飴を少々加えて煮詰めた飴のこと。江戸時代初期にポルトガルから伝来した砂糖菓子だが、明治時代には日本で彩りや形が様々な有平糖が作られていた。⑤は、「美しい家」を表わすため、あえて有平糖を持ち出して意識したことが考えられる。この本は、日曜学校の話材本である。有平糖は、話材のための脚色でもあつただろう。

⑥の三本白とは、^{さんぽんじろう}三盆白のこと。四国地方で作られ、和盆や和臼とも称される白砂糖のことである。砂糖については、次章で考察する。

さて、明治時代の人々は、パンでできた家をどう理解しただろうか。ドイツの主作物は、ジャガイモ栽培が本格的に始まる一八世紀末以前はライ麦や小麦である。したがって主食はパンで、家庭のパン焼き窯で焼くのが日常であつた。③これに対して日本では、パンが米に次ぐ主食として全国的に広まり定着するのは、第二次大戦後のことである。アメリカの占領下にあつた日本は、アメリカから小麦を輸

入して小学校の給食でパンを普及させたのである。

日本のパンの歴史を調べると、天保一三（一八四二）年に伊豆韮山で代官の江川英龍が初めて作ったが、このパンは、現在の乾パンのような水分が少ない硬パンで、戦争に備えた兵糧であつた。

文久二（一八六二）年、日本で初めて食パンが焼かれた。イギリス人のパン職人ロバート・クラークが横浜に「ヨコハマベーカリー」を創業し、横浜に居留する外国人向けに山形食パンを焼き始めたのである。明治一一（一八七八）年に打木彦太郎（一四歳）がこの店の見習工となり、一〇年後に「横浜ベーカリー・宇千喜商店」を創業したが、当初は日本人にパンが売れず商売にならなかったという。⁽²⁾

あんパンが誕生したのは明治七（一八七四）年。木村安兵衛が銀座に木村屋を創業し、翌年、明治天皇に酒種を使った「桜あんぱん」を献上した。ジャムパンの誕生は三三年。三代目儀四郎が、アンズジャム入りのパンを作り評判を得た。木村屋は、二六年に静岡・新潟・金沢に直営店を開き、三六年には大阪にも進出した。⁽³⁾ クリームパンは、三七年に相馬愛蔵（新宿中村屋の創業者）が初めて作った。

このように、明治時代の日本ではパンの歴史は浅く、人々

にはパンでできた家はイメージしづらかったと考えられる。それが三五年の②「見慣れない家」に表われているだろう。なお、四一年の③になると、「家はおいしいパンや菓子でこしらえている」とあり、「おいしい」という表現が現われている。明治後期には、ジャムパンやクリームパンが評判になっている。パンや菓子でできた家は架空の家であるが、当時の読者はこの家に、おいしさを感じるようになっていたことが推察できる。

お菓子の家の挿絵―明治時代―

日本で初めて「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家の場面が描かれたのは、管見では明治四四年。次に挙げた挿絵が初出である。ただし家は、お菓子でできてはいない。

一頁を使用し、
て絵を掲載し、
次頁で「赤い目
をした、かじか
んだやうな老婆
（おばあ）
さんが杖をつひ
て出て来ました。



【挿絵1】⑥明治44年、日野蕨村『家庭講和ドイツ伽噺』岡村書店

二人は、一目見て、びつくらして、手のものをすつくり落しました」と、絵の説明をする。本文には、「家はパンで建ててあって、パン屑で家根が葺いてありました。窓は、三本白で作らえてありました」とある。

しかし絵は、パンで建てた家が想像できなかったのか、木造の家を描いている。老婆（魔女）は杖をつき、エプロン姿。ヘンゼルは王子風の装い。近世ヨーロッパで用いられたジャボ（褌付きの胸飾り）を着けている。これを着けた時のボトムスは半ズボンで、靴はパンプス、靴下は絹製の白いハイソックス。グレーテルは、中世ヨーロッパで用いられたケープマントを頭から羽織っている。兄妹は貴族的に描かれ、妹のグレーテルの方が年上に見える。

四、大正時代の「ヘンゼルとグレーテル」

お菓子の家の翻訳・表現、挿絵

大正時代の翻訳本

大正時代の翻訳に以下のものがある。⁽²⁶⁾ 題名は、⑤「林へ子を捨てに」、⑦「森の家」とある。グレーテルの名は、④はグレテル、⑤の文中でもグレテルとある。なお①④⑤は、

お菓子の家を描いている。絵は、お菓子の家を視覚的に知り得る重要な資料であり、お菓子の家のイメージ形成にも大きな影響を与える。

①大正三年 ヘンゼルとグレーテル

小笠原昌斎『グリムお伽噺講義』上巻

精華書院

②大正三年 ヘンゼルとグレーテル

田中樸吉『グリムムの童話』

独和对訳独逸国民文庫、南山堂書店

③大正三年 ヘンゼルとグレーテル

年岡長汀『独和对訳グリム十五童話』

南江堂書店

④大正五年 ヘンゼルとグレーテル

中島孤島「グリム御伽噺」富山房

⑤大正一〇年 林へ子を捨てに

三宅房子『金の船』キンノツノ社

⑥大正一三年 ヘンゼルとグレーテル

金田鬼一『世界童話大系』第二巻独逸篇

世界童話大系刊行会

⑦大正一四年 森の家

馬場直美『通俗泰西文芸名作集』帝国講学会

大正時代のお菓子の家、翻訳・表現

大正時代のお菓子家たちには、兄妹が森の中で見つけた家を、何と翻訳しただろうか。先に挙げたグリム本の翻訳と、明治時代の翻訳を念頭に置いて、大正時代の本文を見てみよう。

表3

番号・年	家	家の様子	屋根	窓	挿絵番号
①T3	一軒の家	パンで出来ている	お菓子で葺いてある	白い砂糖	2
②T3	可愛らしい小さな家	パンで建てられている	お菓子で葺かれてある	真白な砂糖	
③T3	小さい家	パンで建ててある	菓子で葺いてある	透明な砂糖	
④T5	一軒の小屋	残らず麵麴で出来ている	菓子で葺かれている	窓ガラスは透明な水砂糖	3
⑤T10	一軒の小屋	不思議にもパンで出来ている	お菓子で葺いてある	窓硝子はすき通る水砂糖	4
⑥T13	小さな家かわいらしい家	パンでこしらえてある	お菓子	白砂糖	
⑦T14	小さなきれいな家	まア驚いた、みんなお菓子で出来ている	菓子パン	真白な砂糖	

う。表現の違いや変化がわかりやすいよう表で示そう。

グリム本の「小さな家」は、大正時代になると、一軒の家・小屋、可愛らしい家、きれいな家へと変化する。屋根も、グリム本の「ケーキ葺き」、明治時代の乾酪・パン屑葺きから、お菓子葺きに変わる。⑦の、家全体が「お菓子で出来ている」という表現に注目しておきたい。

窓は、グリム本では白い砂糖だが、明治時代に「白い」という表現は消え、大正時代は、白い・真つ白な・透明な砂糖と表現される。また明治時代に、窓は氷砂糖できている③、硝子窓に氷砂糖を嵌めている①、大正時代に、窓ガラスは透明な・すき通る氷砂糖できている④⑤とあり、グリム本にはない「氷砂糖」が登場し、窓の作りが詳しく表現される。

ではなぜ明治時代以降、家の材にグリム本にはない「氷砂糖」が登場し、窓に氷砂糖を嵌めていると表現され、大正時代に砂糖と氷砂糖に白さと透明さの表現が加わるのだろうか。

これには、日本の砂糖産業が関係していると考えられる。日本の砂糖産業を調べると、正徳五（一七一五）年、幕府は砂糖の輸入制限を行ない、国産化の方針を打ち出し、全

国的にサトウキビの作付けを奨励した。サトウキビ栽培は気候温暖な西南日本の地域で「和糖業」として広まり、一七九八年には讃岐の砂糖（和三盆）が登場した。

しかし、明治時代に入り鎖国制度が解かれると、外国から安価な砂糖が輸入されて国内の砂糖は打撃を受け、奄美・沖縄の黒砂糖を除く和糖業は壊滅した。けれども明治二八（一八九五）年、日清戦争で勝利した日本は台湾を統治し、台湾で大規模なサトウキビ栽培を行ない、製糖工場（近代的分蜜粗糖工場）を設立した。そして日本には粗糖を精製する精製工場が建設され、太平洋戦争が始まる昭和一六（一九四一）年まで、砂糖の生産が飛躍的に拡大したのである。

①②⑥⑦に、窓は白い・真っ白な砂糖でできている、③に透明な砂糖でできているとある。この砂糖は、上白糖じょうはくとうのイメージで理解されていただろう。なぜなら、大正時代の人々にとって、砂糖といえば上白糖（白砂糖）であり、これは日本独自の砂糖である。褐色の原料糖を工場で加熱・濾過をくり返し、不純物を取り除くと透明な砂糖ができる。細かい透明の結晶の集まりは、光の加減で白く見えることから上白糖と呼ばれた。

また、窓に氷砂糖を嵌めている表現の背景には、氷砂糖とガラスの歴史が関与しているだろう。氷砂糖が日本で作られ始めたのは寛政年間以降で、生産が本格化するのは明治時代である。明治一六年に静岡県の鈴木藤三郎が氷砂糖製造法を確立。二八年に福井浅吉が氷砂糖の製造販売業「日本氷糖」を創業した。大正時代には、品質が良く白いもの、氷のようにきれいな結晶のものが作られ始め、大正一〇年の月間生産量は三〇トンであった。グリム本には見られず、明治・大正時代の翻訳に現われる氷砂糖は、当時の日本の砂糖産業を投影したものとと言える。

そして、日本でガラス製の窓が作られるようになるのは、明治時代以降である。板ガラスの製造方法は「手吹き円筒法」で、日本の職人には難しく外国の職人が製造していたが、明治四〇年代になると、日本人の手で生産され始めた。翻訳に窓ガラスが現われるのは、明治三五年の①、大正五年の④、一〇年の⑤で、ガラスの生産が本格化する時期と合致する。ただし、ガラスは高価で、財力のある家でなければ購入できず、一般家庭で窓全体に板ガラスを嵌めこんで使用する状況は、昭和時代に入ってからのことであった。²⁰

お菓子の家の挿絵―大正時代―

①の本文に「家はパンで出来ていて、屋根はお菓子で葺いてありますし、窓は白い砂糖で出来ていました」とある。

挿絵2は、ドイツの

ルートヴィヒ・リヒ

ター（一八〇三―一八四

）が描いた絵を用いてい

る。屋根は、右側が石

置屋根風に描かれ、上

に丸いパンのような物

を八個乗せている。煙

突はミルクポット。そ

の蓋が開いて湯気が出ている。

④の絵は岡本帰一（一八八八―一九三〇）。管見ではこれ

が、日本で描かれ

た、お菓子ででき

た家の初出であ

る。本文に「小屋

は残らず麵ぼんで

出来ていて、家根やね



【挿絵2】①大正3年、小笠原昌斎『グリムお伽噺講義上巻』精華書院



【挿絵3】④大正5年、中島孤島『グリム御伽噺』富山房

は菓子で葺かれ、窓ガラスは透明な氷砂糖でした」とある。屋根は、古くからドイツなどヨーロッパの家で使用されているスレート屋根（天然スレート）風に描かれている。

ヘンゼルは、菓子でできた屋根に右手を伸ばし欠いている。左手に一かけら持っている。

窓に透明な丸いガラス（氷砂糖）が一五枚嵌っており、向かって右側二列目の下の一枚が欠損している。それを今、グレーテルが食べている。老女が戸を開け顔を覗かせている。

⑤の本文に

「小屋は不思議に

もパンで出来て

いて、屋根はお

菓子で葺いてあ

り、窓硝子はす

き通る氷砂糖」とある。また、ヘンゼルは、飛び上がって

屋根を少し欠いて食べ、グレーテルは、窓の所へ行きガラ

スを千切って食べた、とある。

挿絵4に描かれた、三角屋根のお菓子は何だろうか。窓は描かれていない。



【挿絵4】⑤大正10年、三宅房子『金の船』キノ社

五、昭和時代の「ヘンゼルとグレーテル」 お菓子の家の翻訳・表現、挿絵

昭和前期の翻訳本

以下に示したのは、昭和二五（一九五〇）年までに出版された本である。^③①～④は昭和初期、⑤～⑩は戦後間もない時期の本である。後述するが、昭和一二（一九三七）年の日中戦争時から二〇年の太平洋戦争終結時までの間、「ヘンゼルとグレーテル」が翻訳されていないことが判明した。④の題名「お菓子の家」に注目しておきたい。お菓子の家の挿絵は、④⑨を除くすべてにあり、③⑥はカラー口絵である。

- ①昭和二年 ヘンゼルとグレーテル
 菊池寛訳『グリム童話集』文芸春秋社
- ②昭和二年 ヘンゼルとグレーテル
 『西遊記 ドン・キホーテ グリム童話』
 金の星家庭文庫三、金の星社
- ③昭和三年 ヘンゼルとグレーテル

- 『グリム童話集』金の星児童文庫五、金の星社
- ④昭和八年 お菓子の家
 蘆谷蘆村『お母様のお話と子供の教養』
 日本童話協会出版部
- ⑤昭和二一年 ヘンゼルとグレーテル
 相良守峯訳 武井武雄絵
 『グリム傑作童話集上』羽田書店
- ⑥昭和二三年 ヘンゼルとグレーテル
 秋山淳訳 石井新三郎絵
 『赤バラ白バラグリム童話集』宝雲社
- ⑦昭和二三年 ヘンゼルとグレーテル
 金田鬼一訳 有岡一郎絵『グリム童話上』
 銀の鈴文庫 広島図書
- ⑧昭和二三年 ヘンゼルとグレーテル
 森鷗外・森於菟共訳 脇田和絵
 『しあはせなハンス』文芸春秋新社
- ⑨昭和二四年 ヘンゼルとグレーテル
 楠山正雄訳『グリム童話名作集』
 世界おとぎ文庫、小峰書店
- ⑩昭和二五年 ヘンゼルとグレーテル

木下 一二 訳『グリム童話集 美しいお話の巻』

東京読書会

昭和前期のお菓子の家、翻訳・表現

昭和前期の翻訳者たちは、兄妹が森の中で見つけた家を、何と表現しているだろうか。グリム本の翻訳と、明治・大正時代の翻訳を念頭に置いて、昭和前期の本文を見てみよう。

表 4

番号・年	家	家の様子	屋根	窓	挿絵番号
① S2	一軒の小さな家	そっくりパンでできている	お菓子の瓦	窓硝子はみんな透きとおった氷砂糖	5
② S2	小さな小屋 今までに見た事もない 奇妙な小屋	すっかりパンで出来ていて、周囲にはお菓子が飾られている。階段は桃の実で出来ていた		透き通った氷砂糖	6
③ S3	②に同じ	②に同じ		②に同じ	7
④ S8	小さなお家 きれいなお家	どこからどこまで、すっかり、おいしいお菓子がこしらえてある。柱はぶかぶかしたパン。軒にはびかびかするチョコレートがぶら下がっている	きれいなおせんべい	すきとおった氷砂糖	
⑤ S21	小さな家	パンで出来ている	お菓子でふいてある	まっ白な氷砂糖	8

⑩ S25	⑨ S24	⑧ S23	⑦ S23	⑥ S23
かわいらしい家	かわいい小屋	小さい美しい家	ちいさな家 なんだかへんなうち	一軒の家 たいへんな家
パンでこしらえてある	パンでできている	パンで築き上げてある	家ぜんたいがパン	まわりはパンでできている
おかし	お菓子で葺いてある	菓子で葺いてある	お菓子	お菓子
白ざとう	お砂糖 びかびかする	硝子窓には氷砂糖が嵌めてあった	白いおさとう	砂糖でいつぱい
12		11	10	9

家は、②③は「見た事もない奇妙な小屋」、⑦は「なんだかへんなうち」とあるが、明治・大正時代と同様に、美しい・かわいらしい家とする。家の材に、桃の実②③、チョコレート・せんべい④、が現われることに注目しておきたい。

⑨は窓を、「びかびかするお砂糖」とする。昭和時代の人々はこれを、白双糖とイメージしただろう。なぜなら、砂糖といえば、外国ではグラニュー糖、日本では上白糖が一般的だが、白双糖は、グラニュー糖や上白糖と比べて結晶が大きく、高純度で無色透明、光沢があるのが特徴。大正十一年に製造が開始され、高級品のイメージが強かった砂糖である。

昭和時代の「ヘンゼルとグレーテル」の翻訳・出版と、お菓子の家の表現には、砂糖と菓子の現況が関係している。とりわけ戦中、戦後はそれが顕著に表われている。

昭和一四年の砂糖一人当たりの年間消費量は、約一六kg。砂糖は国内で自給され、庶民にも一般的なものになっていた。しかし、一五年からは消費量が減少する。一六年、太平洋戦争に突入すると、台湾で生産された粗糖を日本に輸送することが困難になり、敗戦で台湾を失い、日本の砂糖不足は深刻なものとなった。一六年からの砂糖配給制は二七年まで続き、二一年の一人当たりの消費量は、約二〇〇gとなった。この間に、多くの菓子店が戦災を受け、菓子原料も配給で、菓子業界は壊滅的な打撃を受けた。終戦直後、苦勞して砂糖や小豆を仕入れ、パンを焼くなどして辛うじて営業を行なう店はあったが、経営が軌道に乗ったのは、砂糖の統制が解除された昭和二七（一九五二）年以降であった。二七年には、砂糖一人当たりの消費量は、約一〇kgまで回復した。

「ヘンゼルとグレーテル」は、戦前に四種（①～④）が出版されているが、日中戦争から太平洋戦争終結時までは出版されていない。ところが、戦後の昭和二年から二五年

の間に六種（⑤～⑩）が出版されている。そして二七年以降は、グリム童話から単行化されて絵本になり、続々と出版されるのである。戦後の絵本の出版が、砂糖の統制解除と同時期に起きているのである。

お菓子の家の挿絵—昭和前期—

①の本文に

「二軒の小さな家は、そっくりパンでできている。屋根はお菓子の

瓦で、窓硝子はみんな透きとおった氷砂糖」とある。ヘン

ゼルは、パンがどんなにおいしいか背伸びして屋根を少し千切って食べ、グレーテルは、窓硝子に大きな穴を開けて下に座って食べる、とある。

挿絵5は、窓は描かないものの、おおよそ本文に沿って描かれている。

②の本文に「今までに見た事もない奇妙な小屋。すっかりパンで出来ていて、周囲にはお菓子が飾られています。



【挿絵5】①昭和2年、菊池寛訳『グリム童話集』文芸春秋社

窓は透通った氷砂糖で出来ていて、階段は桃の実で出来ていました」とある。

挿絵6では、屋根は巨大なイギリスパン。壁に絞り出しクリーム（ポツシュ絞り）。二



【挿絵6】②昭和2年、『西遊記 ドン・キホーテ グリム童話』金の星社

段階段の端に、桃を三個描く。兄妹に幼さはなく、女風に描かれる。

③のカラー

口絵の題名に「お菓子の家」とあり、口絵の説明に「お菓子の家の戸



【挿絵7】③昭和3年、『グリム童話集』金の星社

が開いて、歳とったお婆さんが現われました」とある。

挿絵7は、老婆に驚いた兄妹が、手に持っていた菓子を落とす場面を描く。屋根は、ドライフルーツ入りの巨大な白パンに見える。グレーテルが欠いた窓ガラス（三棹のう

ちの真ん中）が描かれる。兄妹は、大人びた西洋の少年少女風に描かれる。

⑤の絵は武井武雄（一八九四—一九八三）。本文に「小さな家はパンで出来ていて、屋根はお菓子の家でありました。窓はという



【挿絵8】⑤昭和21年、相良守峯訳『グリム傑作童話集』羽田書店

家は二階建て。屋根はビスケットで、その上にカップケーキが乗る。柱と煙突は有平糖のねじり棒飴。ヘンゼルは、屋根にあるのと同じ巨大なビスケットを抱えている。

⑥のカラー口

絵は、石井新三郎。ドイツのルートヴィヒ・リヒ



【挿絵9】⑥昭和23年、秋山淳訳『赤バラ白バラグリム童話集』宝雲社

ターの絵を模倣。本文に、「たいへんな家です。まわりはパンでできているし、屋根はお菓子、そして窓は砂糖でいっぱいです」とある。

⑦の絵は有岡一郎（一九〇〇—六六）。本文に「ちいさな家、なかへんなうち、家ぜんたいがパンで、やねがお菓子で、まどは白いおさとうでこしらえてありました」とある。家の形と人物の構図は、ルートヴィヒ・リヒターの絵に似る。

⑧の絵は脇田和（一九〇八—二〇〇五）。本文に「小さい美しい家は、よく見るとパンで築き上げてあって、屋根は菓



【挿絵 10】⑦昭和 23 年、金田鬼一訳『グリム童話』広島図書



【挿絵 11】⑧昭和 23 年、森鴎外・於菟共訳『しあはせなハンス』文芸春秋新社

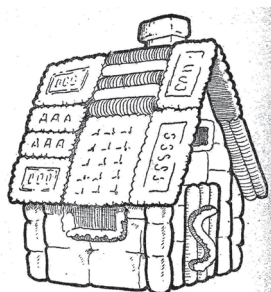
子で葺いてあり、硝子窓には氷砂糖が嵌めてあった」とある。

挿絵では、屋根は二枚のビスケット。正面に、ねじり棒とフィンガービスケットを描く。

⑩の本文に「かわいらしい家は、パンでこしらえてあって、屋根はおかしでした。まどは白さとうで出来ていました」とある。

挿絵 12 は、人物は描

かず、ビスケットを主に作った家のみ大きく描く。の有り様に目が向けられて来たことが窺える。



【挿絵 12】⑩昭和 25 年、木下二一訳『グリム童話集 美しいお話の巻』東京読書会

六、「お菓子の家」と

単行本『ヘンゼルとグレーテル』

「お菓子の家」という語

大正一四年の⑦に、家は「みんなお菓子で出来ている」とある。ただし、この期にはまだ「お菓子の家」という語

は現われていない。

「お菓子の家」の語の初出は、管見では、昭和三（一九二八）年の③にある口絵の題名と説明文である。そして昭和五年、西条八十の作詞曲名に「お菓子の家」があり、「山おくの谿あい」にきれいなお菓子の家がある。門の柱はあめんぼう屋根の瓦はチョコレイト。左右の壁は麦らくがん。ふむ敷石がビスケット。あつく黄色い鎧戸も。おせばこぼれるカステイラ。静かに午をしらせるは。金平糖の角時計」と、六種の菓子で作られた「お菓子の家」が歌われる。そして、昭和八年の④では、題名が「お菓子の家」で、本文に、「家は、どこからどこまで、すつかり、おいしいお菓子でこしらえてある」とある。

神戸市に洋菓子の「ゴンチャロフ」「ユーハイム」が開業したのは、大正末期。「モロゾフ」は昭和六年。日本と外国の菓子職人が共に働き、職人は、チョコレイト、キャンデー、クッキー作りとパン焼きができて一人前と見なされたため、洋菓子店ではこれら全部を品揃えていた。^③また、森永製菓は昭和三年に、全国の小売店でキャラメル、チョコレイト、ビスケット、ドロップスを販売していた。^③

このような洋菓子の現況が背景にあつて、大正末期の⑦

で、家がすべてお菓子でできていると表現されたのであろう。そして、昭和三年の③の口絵に「お菓子の家」と記されているように、昭和初期に「お菓子の家」という語が誕生したのであろう。グリム本の「パンでできた家」を、日本で「お菓子の家」と表現するようになったのは、昭和初期からと言える。

単行本になった『ヘンゼルとグレーテル』

本屋の児童書コーナーに、絵本『ヘンゼルとグレーテル』が並んでいる。「ヘンゼルとグレーテル」は、グリム童話（全二〇話）の一五番目の話である。この話が、一九五〇年代にグリム童話から単行化されて絵本になったと考えられる。管見での初出絵本は、昭和二八（一九五三）年の、飯沢匡・文、川本喜八郎・人形、土方重巳・絵『ヘンゼルとグレーテル』（ストリートブック3、トッパン）である。^③

菓子業界をふり返ると、前年の二七年に、小麦や砂糖の統制が廃止され、チョコレイトの原料カカオバターの輸入が自由化され、業界に活気が戻り始めた頃にあたる。

では、これまでに何種の絵本『ヘンゼルとグレーテル』が出版されてきただろうか。一九五〇年から二〇一九年ま

でを調査し、結果を年代ごとに示そう。一九五〇年から二〇一七年までは『出版年鑑』（出版ニュース社）、二〇一七年以降は『本の年鑑』（日外アソシエート）に拠って調査した。

一九五〇年代	一四種	一九六〇年代	一六種
一九七〇年代	五種	一九八〇年代	六種
一九九〇年代	一〇種	二〇〇〇年代	一〇種
二〇一〇年代	八種		

『ヘンゼルとグレーテル』は、一九五〇年代と六〇年代に多く出版された。五〇年代の一四種のうち一二種は新刊本、二種は重版本。六〇年代の一六種のうち一一種は新刊本、五種が重版本である。また、九〇年代と二〇〇〇年代に再び多く出版され、各々一〇種は新刊本である。

一九五〇、六〇年代は高度経済成長期で、洋菓子ブームが訪れた。六〇年代に、日本の菓子職人が技術研修のためヨーロッパへ赴き、またヨーロッパの職人を日本へ招いて、日本に本場の味・技術・菓子文化が広がった。一九五〇年代以降の絵本の表紙絵を通覧すると、そのほとんどがお菓子

の家を描いている。³⁶⁾

また、『日本書籍総目録』（国内で発行され、購入が可能な本の書名、著者名、発行所を記した目録。一九七七年から二〇〇一年まで毎年出版された）を調べると、該当年に購入できた『ヘンゼルとグレーテル』が何種類あったかが判明する。目録に拠り一九七七年から調査し、八〇年、八五年と五年刻みに調べ、以下の結果を得た。

一九七七年	九種
一九八〇年	一四種
一九九〇年	三〇種
二〇〇〇年	二六種
一九八五年	二二種
一九九五年	二九種

購入可能な本は、一九七七年は九種だが、次第に増え、九〇年には三〇種あったことが知られる。本の分類を調べると、一九七七年と八〇年は、新潮文庫本を除けば、幼児・小学生向け絵本である。八五年には『ヘンゼルとグレーテル』の海外の絵本が翻訳され、また英語教材本が作られ、読者に小学校高学年から中・高生が取り込まれた様子が窺える。九〇年、九五年になると、『ヘンゼルとグレーテル』

の海外のピアノ用絵本が翻訳され、日本でも幼児から中学生向けのピアノ連弾用の楽譜本が作られ、二〇〇年にはミュージカル本も販売されていた。

現在の状況は、「Honya Club ホンヤクラブ」で調査ができる。これは、注文して書店または宅配で購入可能な本が一覧できる、日本出版販売が運営するインターネット書店である。これによると、二〇二二年現在、『ヘンゼルとグレーテル』名を冠した二六種の本が購入でき、それらはほぼ絵本である。絵本人気が窺えるとともに、「ヘンゼルとグレーテル」話は、絵本を通じて知る機会が多いことが表われている。

おわりに

明治後期、日本で「ヘンゼルとグレーテル」の翻訳が始まった。初めての翻訳者は森於菟で、明治三五年であった。いわゆる、お菓子の家の場面は、明治四四年に初めて描かれたが、家はお菓子でできてはいなかった（挿絵1）。お菓子の家は、大正三年にはルートヴィヒ・リヒターの絵が用いられ（挿絵2）、大正五年に岡本帰一によって初めて描か

れた（挿絵3）。

明治から大正時代の日本は、近代化が進み、住宅に西洋化が浸透し始め、洋菓子の製造技術が導入されて洋菓子店が出現した時期である。

昭和初期、グリム本の「パンで作られた家」は、日本で「お菓子の家」へと変化した。そして戦後の一九五〇年代、「ヘンゼルとグレーテル」はグリム童話から単行化されて絵本になり、以来、様々なお菓子の家が描かれてきた。これは、日本が戦後の混乱を経て高度経済成長を遂げ、生活が豊かになり様々なお菓子が誕生した時期であった。

お菓子の家の場面の翻訳と絵画化は、グリム本に沿って忠実に行なわれてきたのではない。当初から、グリム本にはない家材（菓子・氷砂糖・せんべい・チョコレートなど）が登場している。お菓子の家の場面は、グリム本を超えて日本で独自に展開したと言え、ここに日本におけるドイツ文学の享受の一端を窺うことができる。

紙幅の都合上、五〇年代以降を詳述できないが、表現された家の外観や装飾などに、日本の住宅と菓子事情が投影していると考ええる。なぜなら家は、食べ物やファッションと同様に流行があり、時代や家族形態の変化によって変遷

するからである。一九五〇、六〇年代は、戦後の住宅不足緩和策として集合住宅が建てられ、庭付き一戸建てが憧れの対象となり、七〇年代は子ども部屋確保のため二階建ての家が建てられた。八〇年代にはアーリーアメリカンスタイル、九〇年代にはブリティッシュスタイルが好まれ、二〇〇〇年代に入ると、南欧・北欧・モダンスタイルなどの様式が取り入れられた。このような住宅デザインの変遷が、お菓子の家にも投影しているだろう。

また、日本と世界各国で描かれたお菓子の家を比較することも必要であろう。オーストリアのハインリヒ・レフラー（一八六三―一九一九）、イギリスのアーサー・ラツカム（一八六七―一九三九）、バーナデット・ワッツ（一九四二―）、デンマークのカイ・ニールセン（一八八六―一九五七）、チェコのヴォイチェフ・クバシュタ（一九一四―一九二二）、アメリカのスーザン・ジェファーズ（一九四二―二〇二〇）らは、お菓子の家を描いている。日本人が描いた絵との違いが明らかで、この違いに、各国の「ヘンゼルとグレーテル」の享受や菓子文化が表われていると考える。

ヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけた時の様子や、お菓子の食べ方にも注意して明治以降の本文の変遷を

追えば、各年代の子どもの像や、食の現実までもが浮上すると考える。

今、あらゆる食品が溢れ、人々の嗜好が多様化している。お菓子の家は洋菓子で作られている。洋菓子は、クリーム・バター・卵などの動物性材料が主で、食物繊維が少なく高カロリーとされる。砂糖や菓子の摂取弊害も叫ばれている。このような時代に、お菓子の家がどのように表現されてゆくのか、今後の変遷を見つめて行かなければならない。

注

（１）これらは、ヘンゼルとグレーテルの後日談を大胆な発想で描いたアクション・ホラー映画である。

（２）この本は、一九六三年のハンス・トラクスラー『ヘンゼルとグレーテルの真相』を、二〇一二年に矢羽々崇・たかおまゆみが翻訳したもの。「ヘンゼルとグレーテル」話を史料と発掘から史実と裏付けたフィクション。

（３）お菓子の家作りを数例挙げると、二〇一六年に中丸雄一が作り（日本テレビ「シューイチ」）、二〇二二年にホテルメルバルク長野がお菓子とパンで作り、MEGAドン・キホーテ函館店では女性たちが駄菓子で作り、大分市の祝祭広場では

学生たちが市販菓子を用いて作った。

- (4) 森永、ブルボン、ロッテは、各々「おかしなおかしの家でづくりキット」「プチクマのお菓子のおうち」「コアラのマーチおかしハウス」を販売。ロイズは「チョココレートの家」、無印良品は自分で作って組み立てる「ヘクセンハウス」。イケア、フライングタイガー、カルデイは「ジンジャーブレッドハウス」など数種を販売。

- (5) アンテノールは「サンタのお菓子の家」を販売。

- (6) 稿者は、クリスマスケーキのカタログ・パンフレットを収集。通覧すると、装飾品（サンタクロース、小人、トナカイ、ヒイラギ、モミの木、斧、雪の結晶、イチゴなど）に、年代や年ごとの特徴や流行が見られる。

- (7) 本学深草図書館では、二〇一二年と一三年に、グリム資料展が開催された。また、中山淳子（本学名誉教授）の『グリムのメルヒェンと明治期教育学』（臨川書店、二〇〇九年）が出版された。

- (8) なお、水野信太郎「グリム童話お菓子の家具体像の究明」（北翔大学短期大学部研究紀要、二〇二二年）がある。

- (9) 寺村輝夫・文、永井郁子・絵『ヘンゼルとグレーテル』世界名作おはなし絵本、小学館

- (10) いもとうようこ文・絵『ヘンゼルとグレーテル』金の星社
- (11) マカロンは、フランスの代表菓子。初めて日本に紹介され

- たのは一九七四年。雑誌『ノンノ』のバリのお菓子屋さん特集で、「ダロワイヨ」のマカロン（ピンク、黄色、白色）が「日本の最中みたいなケーキ、フランス式の最中です」と紹介された。一九八二年にダロワイヨが東京自由が丘に開店。二〇〇八年には「ラデュレ」の日本一号店が銀座にオープン。二〇〇九年のテレビドラマ「銭ゲバ」でマカロンタワー（マカロンを大量に積み上げ、富裕者の食べ物とした）が作られ、これを機に日本でマカロンが広く知られることになった。

- (12) ヴィルヘルムは、このドルトヒェン（一七九三—一八六七）と結婚した。「ヘンゼルとグレーテル」話は、一八二二年の第一巻初版本に収めていたが、翌年、ドルトヒェンがより良い形で話を語ったので、ヴィルヘルムは初版本を書き換え、現在知られる話となった。

- (13) グリム童話の挿絵は、高木昌史『グリム童話を読む事典』（三交社、二〇〇二年）、下宮忠雄『グリム童話・伝説・伝記・神話・文法小辞典』（同学社、二〇〇九年）など参照。

- (14) この絵は、高橋健二『グリム童話全集1』（小学館、一九七六年）などで確認できる。

- (15) エルンスト・クライドルフはスイス生まれだが、絵はミュンヘンの美術工芸学校と美術アカデミーで学んだためにここに挙げた。

- (16) 久保華譽『日本における外国昔話の受容と変容 和製グリムの世界』(三弥井書店、二〇〇九年)、大野寿子編『カラー図説グリムへの扉』所収「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」(勉誠出版、二〇一五年) 参照。
- (17) 順に、フローチャー美和子『初版以前グリム・メルヘン集』(東洋書林、二〇〇一年)、吉原高志・吉原素子『初版グリム童話集』(白水社、一九九八年)、小澤俊夫『完訳グリム童話1』(ぎょうせい、一九八五年)、野村滋『決定版 完訳グリム童話集1』(筑摩書房、一九九九年)に拠った。
- (18) 野村滋の他に、第七版を翻訳した金田鬼一は、屋根を「卵やきのお菓子」(完訳グリム童話集1、岩波文庫、一九七九年)、高橋健二は「おかしでできている」(完訳グリム童話集1、小学館、一九八五年)と訳している。
- (19) 川戸道昭など編『明治期グリム童話翻訳集成』(ナタ出版センター、一九九九年)、同『日本におけるグリム童話翻訳書誌』(同、二〇〇〇年)、同『児童文学翻訳作品総覧』(同、二〇〇五年) 参照。
- (20) 昭和二十七年の中島孤島の翻訳本(『グリム童話』富山房)でも、グレートレルの名はグレートルとある。
- (21) ①③は、川戸道昭など編『明治期グリム童話翻訳集成』(ナタ出版センター、一九九九年)、④⑥は、国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。
- (22) チーズは、『日本大百科全書』(小学館、一九八五年)の「チーズ」の項、錫田文三郎『チーズのきた道』(講談社学術文庫、二〇一〇年)など参照。
- (23) 山本紀夫『ジャガイモのきた道 文明・飢饉・戦争』(岩波新書、二〇〇八年)、舟田詠子『パンの文化史』(講談社学術文庫、二〇一三年) 参照。
- (24) なおこのパン屋は、「ウチキパン」と名を変えて現在も横浜元町でパンを焼いている。
- (25) 大山真人『銀座木村屋あんパン物語』(平凡社新書、二〇〇一年) 参照。
- (26) 注(19)に同じ。
- (27) 国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。
- (28) 平沢正夫『砂糖』(平凡社カラー新書、一九八〇年)、新光製糖株式会社社史編集委員会『新光製糖五〇年の歩み 砂糖・氷砂糖の歴史』(日経事業出版社、一九九四年)、伊藤汎監修『砂糖の文化誌—日本人と砂糖—』(八坂書房、二〇〇八年)、日高秀昌など編『砂糖の事典』(東京堂出版、二〇〇九年)など参照。
- (29) ガラスは、由水常雄『ガラスの話』(新潮社、一九八三年)、『日本大百科全書』(小学館、一九八五年)の「ガラス工業」の項など参照。
- (30) 注(19)に同じ。

(31) ①は架蔵本、②⑩は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。

(32) 砂糖一人当たりの消費量は、金井道夫「わが国砂糖消費の特徴」(農林水産省農業総合研究所、一九六七年)に拠る。

(33) 村上和子『K O B E 洋菓子物語』(神戸新聞総合出版センター、一九九七年) 参照。

(34) 『特別展「森永のお菓子箱エンゼルからの贈り物」』(たばこと塩の博物館、二〇一一年)によると、明治四三年に森永商店(森永製菓の前身)と不二家、大正五年に東京菓子(明治製菓の前身)、同一〇年に江崎商店(江崎グリコの前身)、同一三年に北日本製菓(ブルボンの前身)が創業している。

(35) ドイツ文学の児童書(小学生向け)に分類されていた。この本は人形劇絵本で、第一回産経児童出版文化賞を受賞している。

(36) 表紙に、お菓子の家を描いていない絵本を挙げると、講談社の絵本(松田穰絵・一九五六年、高島華宵絵・一九五七年、柳柊二絵・一九七九年)、たかやまひろし絵(いずみ書店、一九七四年)、佐々木マキ絵(福音館書店、一九九三年)など少ない。

(本学非常勤講師)